

滋賀県でデザイナーとして活動する中土真奈さん。菊川東中学校、小笠高校を卒業後、静岡大学美術・デザイン専攻へ進学。現在は滋賀県で暮らしながら、地元・菊川とお茶への想いを胸に『きくがわ応援大使』として活動を続けています。

## 故郷の菊川茶をみんなに伝えたい

実家は茶農家。県外で暮らす今も、毎日飲むのは菊川茶です。滋賀県にも朝宮茶や土山茶など有名な茶産地がありますが、深蒸し茶は珍しい存在。きくがわ応援大使としてできることを考え、新茶を味わってもらうイベントを滋賀県内で3回開催。来場者からは好評の声が寄せられました。「その先につながる展開がありませんでした」と振り返ります。

## 「お茶の裏側」にこそ、魅力がある

転職となったのは、令和6年12月の「菊川チャレンジビジネスコンテスト」。茶農家として働く両親から、茶価の低下など茶産業の厳しい現状を聞いていた中土さん。「お茶に関わる人たちが、もっと誇りを持って楽しく働けるようにしたい」という想いから、応募を決意しました。着目したのは、お茶そのものではなく、『お茶ができるまでの過程』。「お茶は完成した商品としてPRされることが多いですが、その裏側にある工場や機械、働く人たちの姿が本当に面白くて尊いと気づきました」と語ります。

一つのお茶が完成するまでには、



Instagram

## 地域全体でお茶産業を“ひらく”

多くの人が関わり、バトンをつないでいきます。その産業全体を見せることで、新たな価値や感動が生まれるのではないかと。そんな想いで、お茶に特化した『オープンファクトリー』を提案しました。

『オープンファクトリー』とは、企業などが生産現場を一般公開し、ものづくりを体験・見学できる取り組みのこと。近年では、地域内の企業が連携し、産業全体を『面』として見せる『地域一体型オープンファクトリー』が全国で広がっています。中土さんが目指したのは、まさにその形。茶工場が稼働する様子や荒茶ができるまでの工程、生産者の日常など、ありのままの姿を見せよう。働く人の顔が見えることで、地域の人たちにも仕事への誇りが生まれ、そんな未来を描きました。想いを込めたプレゼンは高く評価され、見事『落合刃物工業賞』を受賞しました。

## 離れて気づいた、菊川とお茶の魅力 お茶産業を“ひらく”デザイナーの挑戦

# 中土真奈さん

### 仲間とともに、菊川を見つめ直す

令和7年9月には、オープンファクトリー開催に向けたフィールドワークを実施。全国からおおよそ20人が参加し、3日間かけて市内の茶農家や関係企業を巡りました。ユーモアと愛にあふれた提案が次々と飛び出し、オープンファクトリー実現への手応えを感じました。

その他には、中土さんの活動を支えているのは、地域の協力者たちの存在です。株式会社美緑園の土井宏通さんや市内生産者の森下真奈美さんも、「お茶産業をひらき、人をつなげたい」という中土さんの想いに共感し、アイデアや助言を寄せています。

### つながりが生んだ新たなかたち

フィールドワークの見学先の一つだったサンogramで開催されたマルシェをきっかけに、「ナップサック」と「手ぬぐい」を製作・販売しました。ナップサックには、菊川やお茶の魅力を詰め込んだアイテムを収納。手ぬぐいには菊川茶に関わるさまざまな人たちがバトンをつなぎ、一杯のお茶ができあがる様子を表現しました。

### 新茶の季節、ついに本番へ

令和8年5月、ついにオープンファクトリー「産地の本番。」を初開催。県内外からおおよそ30人が参加し、新茶シーズン真っ只中の菊川市へ。新芽が輝く茶畑、稼働する茶工場、荒茶が

### 喜びと誇りにつながる活動を

できる工程など、生産者と直接話す時間も多く設けられ、参加者は新茶が生まれる現場を肌で感じました。「一番忙しい時期なので、生産者の皆さんの協力なしでは絶対に実現できませんでした。皆さん自身も楽しんでくれていたのがうれしかったです」と喜びを語ります。

現在も月に一度ほどは菊川へ戻ってくるという中土さん。今後はさらに、お茶に関わるさまざまな人たちを巻き込みながら、地域一体となって活動を広げていきたいと考えています。「住んでいた頃には気づかなかつた菊川の魅力や人の魅力を感じています。これからもいろんな人とながら行ってみたいですね」と目指す姿を語ります。

お茶に関わる人たちの喜びと誇りのために。中土さんの挑戦は、これからも続いていきます。



オープンファクトリーの様子

写真提供：石井裕也+しゃいか!編集部